

良寛様の生き方から思い付いたこと

第三期留学生

李

幼麟
(中国)

花無心招蝶、蝶無心尋花、花開時蝶来、蝶来時花開、吾亦不知人、人亦不知吾、不知従帝則

このわずか七行の詩に、良寛様の思想・生き方などが集約されている。

花と蝶がたがいに無心であって調和が保たれているように、私もまた他人のことを知ろうとはしない。ただ知らず識らずのうちに、天の摂理に則って生きていくばかりだ。このように「人生いかに生くべきか」という深遠なテーマをわずか七句で、またおよそ「人生いかに生くべきか」などの関係のありそうもない花と蝶の比喻

を用いて、この深遠なるテーマをさらりと説いた良寛様に、私は限りなく尊敬を感じた。良寛様は、ご周知の通り、出雲崎町に生まれ、育ったのである。在世当時はそれほど人々に知られていない。それは一体なぜか。私は、他ならぬ、良寛様の生き方に起因すると思っている。良寛様の姿勢を一言で言うなら、他からの評価を問題にせず、自己の信念に基づいて生きるということなのである。これはあらゆる感情を持った人間にはたやすくできることではない。良寛様はある意味での超人である。自然の摂理に

従って生きているだけだと言うであろう。

では、一体、人間の生きる原動力になつてゐるものはないか。すべてがそうだとはいわれないが、その大半は「欲望」ということであろう。

例えば、自分がここまで努力したのは、世間において名声を得たい。地位がほしいからというのが本音ではないだろうか。いかに人より優位に立つかと、四六時中、他人を意識して生きている。「二六時中、己れを意識を以て充滿す。故に二六時中太平の時なし」と夏目漱石氏が言っているように、私たちはいつも殺伐とした世の中に生きているのである。

人が出世したから自分もそれ以上に出世しなければならぬと思う。さて、ここでうまいぐあいに希望が叶つたとする。人は一時、幸福を味わうであろう。しかし、それもつかの間、また自分よりも高い地位にある人に気づく。人はまた、それを越えようと必死になる。結局、人

は限りなく最高の幸福を求め続けるのである。

たとえ、この世で言う“最高”の“幸福”が運よく得られたとしても、これが人間にとつて真の幸福と言えるだろうか。たえず人や己を意識しつつ生きるのが、人間としての生き方なのであるか。

人間の真の生き方とは、また、真の幸福とは、人それぞれが自己の独自性を守つて、それぞれが自分に適したそれぞれの人生の道をつき進んで行くことなのである。

正直言つていままで私だつて日本留学に来て、よい成績で無事に学業を終え、学位をもらつてハクをつけ帰国するという考えがあつたのである。純粹な学問精神は果たしてどれぐらい持つていただろう。

良寛様はそうした俗な考えを非常に嫌つた。血のにじむ努力、修行をするのは、自分の悟り、真理を得るためであつて、そこには、世俗的欲

其象一に旗

勿なほ空そら一に陣じん

一越こ石いし氏うぢ一ひ

良寛の書

【よみ】正月の旗を邀むかうるなく、堂々の陣を撃うつ勿なほれ

「良寛の書」第二卷より

望はみじんもない。

花は蝶を待つて花を開くのでなく、蝶は花が咲いたからと言って飛んでくるのでもない。花や蝶はそんな思惑などらわれずに、それが自然の営みにつながっている。なのに、なぜ人間だけがあくせくと、花や蝶のように無心に自分の務めだけを果たしているわけにはいかないのだろうか。

この詩について言えば、花と蝶、自分と他人のあり方は、自然の摂理であり、その自然の摂理、「帝則」に従う事が大切であるとするのだ。また、ここでは、何の思惑もない「無心」を主調としている。

こうした生き方をした良寛様であるから崇高な心であることを強調し、また、墮落というのは、自分との妥協とみなし、激しくこれを嫌ったのである。

この良寛様の、世間、為政者を意識せず、自

然の摂理に従い、自己の信念に基づき、崇高なものを書きわめるというのは、人間のほんとうの生き方にも言えることである。

良寛様のこうした生き方を、他人は「如愚如魯」と評したりしたが、私はそうではないと思う。あれだけの人格、教養、学識を持ちながら、世に出ることもせず、そうした心を欲と考え、自己の確信した道のりを行く、という最も純粹、自然な人だった。

ともあれ、自身の思想をその生涯をつらぬき通した良寛様である。良寛様に巡り会っただけでも私の日本留学の価値があったし、また、とても及ばぬにしても、その姿勢を少しでも学び、自分だけいい生活さえできればいい、「手段を選ばず」を人生の最高追求目標にしている一部の中国の同胞たちに、少しでも良寛様の生き方をわかってほしいと思う。